

今は、もう秋



日本下水道事業団
理事長

石川 忠男

Tadao Ishikawa

今は、もう秋・・・誰もいない海・・・私は忘れない・・・。昭和43年「トワ・エ・モア」が歌い大ヒットした歌です。今年の夏も海水浴場は相当の人出だったようです。

私は栃木県生まれですが、それでも夏には茨城県日立市常陸多賀の河原子やひたちなか市の阿字ヶ浦に海水浴に連れて行ってもらいました。東京に越してから千葉県保田海岸、岩井海岸、勝浦海岸、神奈川県葉山海岸、鎌倉材木座海岸、茅ヶ崎海岸、横須賀観音崎海岸、走水海岸などに行きました。

大学時代は静岡県西伊豆の戸田村にある寮に寮当番で何度か詰めたこともあります。学生・職員・OBなどが宿泊しますので炊事・洗濯・掃除などの仕事もありますが、海での監視業務などもあり、その時間は海水浴を兼ねられます。大勢の人出の中の喧騒と波の音を聞きながらの浜辺の昼は、それこそ夏本番といった気分になります。

また、ある年は秋休みに友達数人と寮に泊まりに行きました。海岸にはわれわれ以外には誰一人おらず、そんな中で水に浸かっていましたが、それはわびしく、淋しいものでした。秋の海、それも夕方ともなると感傷的になるものです。海はやっぱり夏が最高です。

さて、海水浴の思い出の中で水質汚濁と関連することがあります。昭和34年に臨海学校で岩井海岸に行った時のこと、二日目の朝の体操を終わったときに先

生が「今日の水泳訓練は中止する」と通告しました。せっかく海に来て泳げないなんてとブーイングが起きます。先生の説明によると、東京の「汚い船」が湾外へ出る前に投棄を始めてしまい、潮の流れでこの海岸にも流れてくる恐れがあるため遊泳禁止になったとのこと。

そうです、この時代は東京の下水道もまだ中心部だけにしかなく、それ以外は汲み取って船に乘せ東京湾の外にまいていたのです。今では考えられないことですが、当時は当たり前のことでした。その船が、早く仕事を切り上げるため浚破りの排出を始めたのか、それとも操作ミスをしてしまったのかはわかりませんが、こうした事態のためにこの海岸一帯の海水浴客はとんだ「とぼっちり」を受けることになったのです。

今では東京をはじめ、東京湾に入る流域内の町はほとんどに下水道が整備されていますから「汚い船」もありませんし、こういう事故は起こりません。海も最悪だった昭和40年代頃に比べればずいぶんきれいになってきたと思います。しかし問題になっている富栄養化は引き続き解消されていません。

最近ではお台場で水遊びをする人も見られますが、海水浴にはもう一歩だと思います。下水道の高度処理がさらに進められ、手近なところで海水浴が楽しめればと思うのです。

一部の公共団体の努力だけでは足りません。国・地方公共団体が力を集め、高度処理に取り組む時期に来ているのではないのでしょうか。

